イワギクは云はゞ斜陽族にも相當すると云えよう。しかしこのイワギクも蒙古、シベリヤでは未だ相當に繁栄している。残存植物として最も代表的な古いものは、裸子植物のイチヨウであろう。尚イワギクはシベリヤを越え西の方、ヨーロッパのカルパチヤ山脈まで分布して居り、こゝではイワギクに、Chrysanthemum Zawadskii の学名がつけられて、この名が最も古い学名であるから、現在では種名の hakusanense は止めて Zawadskii を用いている。

栽培種のキクの祖先は、イワギクの仲間とシマカンギクとから交配により中国中部で1200年位前に得られたものであろう。日本の栽培の歴には色々のものがあり、此にノジギクなどの系統も入つている。

残存植物は、やたらに採集すると絶滅する。所謂高山植物も残存植物であるから、今後とも注意してやたらに採集しないようにして戴きたい。

（質問）リュウノウギクとワカサハマギクとは、どう云う点が違うのですか。

（答）リュウノウギクの海岸環境に適應したものがワカサハマギクで、下斗米氏に依れば染色体も倍加していると云はれる。ワカサハマギクの方が葉が厚くて大きい。　〔清水寿久雄記〕

古地圖と地質圖

金沢大学　市川　濱

地図は文化のバロメーターであると云はれる。立派な地図が出来る事は、その基礎として立派な文化のある事を意味し、又それを基礎として更に立派な文化の生まれる素因ともなる。故に日本では何時頃から地図が作られたかと云う事を知るのは我国文化の姿を知る上から、大いに意義のある事である。かゝる目的から見る時は、対象とされる地図は、大名や將軍が軍事的等の特殊な目的で作らせた肉筆の局部地図は珍しいかもしれぬが、一般庶民の文化に取つては無関係なものであつて意味がない。庶民の文化と関係ある為には、多数生産され、多くの人に流布される事の出来るもの、即ち、木版刷りのものでなければならない。そう云うものゝ一つで最も古いと思はれるものに、所謂「行基図」と呼ばれる日本全図がある。表には「大日本国之図」と書かれ、かなり広く巷間に頒布されて居り、僧行基が作つたと伝えられる所から俗に「行基図」と稱せられているが正しくは行基の作ではない。此の地図は寛文年間(約290年前)の出版で、當時の日本の各国の輪廓が丸く示され、その中に国名と主な都市が記入してあり、上下即ち南と北が現行の地図と逆になつて居り、本州の南方に女人島と云うのが設けられ「此の島に行きたる男子生きて帰ることなし」と云う詞がついている。

次いで元禄年間(約260年前)に「大日本國輿地図」が大阪で刊行された。この地図は上が北になつて居り、始めの中は出版年次が明かでなかつたが、難波陳人と記銘してあり、丸の中に後志と書いた印鑑があつたので此によつて元禄年間のものである事が判明した。此の図では地形の輪廓が概ね正しく、各地間の里程、各国の石高が記入してある。但しこの石高は安土桃山時代のもので、不正確であると云はれている。

長久保赤水によつて安永二年(西暦1773年)に出された「大日本輿地路程全図」、一名「赤水図」は経緯度と方位が記された点で注目すべく、地形も現行のものと大差なくて、概ね正しく、更に北海道の南端が図中に書き加えられて来た。この経緯度は始めは蘭学の影響によるものと思はれていたが、実は支那の書物からヒントを得たものであつて、シーボルトも此の地図を激賞したと云はれる。尚この赤水図は次々と改版を重ね、後になると航路も記入され、広く江戸時代の旅行者に用いられた。

幕末に近づくに及び北辺でロシヤとの交渉が盛になり、林子平が日本北方並に南方の辺境の地図を作つたが、之は余り正確ではなかつた。和算で有名な高橋作左エ門の地図も有名であるが、之は幕府へ献上したものであつて多くは出されていない。

有名な伊能忠敬の作つた「日本沿海実測図」は、彼が50過ぎになつてから作図を始めたもので70才の時に完成した。沿海実測図の名の通り、自ら本邦海岸を踏査して描いたもので、海岸地形及び海より見える山が詳細に記入されて居り、明治3年に大学南校版として出版された。普国の陸地測量部が始めて出来た時も此の地図をそのまゝ写して発行した程で、その経緯度も殆んど正確であり、又京都を0度として本初子午線を作るなどの卓見が表れている。

以上は日本地図であるが、それでは普国で発行された世界地図の方はどうであろうか。

世界図に就ては「地球両半球図」を司馬江漢が寛政4年(西暦1792年)に出しているが、此は稀にしか入手出来ない。天体の運行、太陽系の成立から説き起した解説がついて居り、各国の地形、風土、習俗が記述されて居る。又エゾ地峡を堀開すれば、東西洋の交通上便宜である等の卓見がある反面に、欧州で大人国の骨が発見されたとか、太平洋南部にメガラニカ大陸がある等の記載もある。此の図の発刊より4年遅れて寛政8年(西暦1796年)に、オランダの地図を譯した「蛤蘭新譯地球全図」が出たが之も稀品である。*Algemene Waerld Kart* と云う表書きがしてある。

日本独得の世界図として宝永6年(西暦1709年)に京都の僧濬(ジュン)が作つた「南瞻部洲萬国掌菓図」がある。之は支那の利瑪竇(マテオ・リッチ)(トウ)の書いた佛教書から得

た知識が入っている。

須彌山中心の四大洲、即ち須弥山の南に三角形の大地があり、東側に半月形の大地があり、西に円形の大地があり、北方に方形の大地があると云う佛教上の世界観にたち、この4大洲の中の南側の大地、即ち南贍部洲を中心として描いた世界図で、中央に須弥山があり、世界中の大河川は總てこゝに源を発している。尚此の地図を作る為の参考文献としての佛教典の名があげられている。

附記（以上の講演に出た古地図、並に内外の地質図を数多く陳列された）

〔清水喜久雄記〕